

中世語の史的研究-大蔵虎明本狂言集の漢語を中心に-

著者	全 亨式
号	1
学位授与番号	10
URL	http://hdl.handle.net/10097/36852

JEON
全

HEONG
亨

SIG
式

学 位 の 種 類 博 士 (国際文化)

学 位 記 番 号 国博 第 10 号

学位授与年月日 平成12年 3 月23日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科 (博士課程後期 3 年の課程)
国際文化交流論専攻

学 位 論 文 題 目 中世語の史的研究
—大蔵虎明本狂言集の漢語を中心に—

論文審査委員 (主査)

教 授 田 中 継 根

教 授 青 山 隆 夫

助教授 丸 山 宏

助教授 堀 江 薫

教 授 菊 田 紀 郎 (岩手大学)

論 文 内 容 の 要 旨

1. 研究の目的

中世の語彙の特色として、前代に比べて漢語の増加、日常生活への進出ということが挙げられる。文体の面から考えると、漢語の増加あるいは漢語の勢力が強くなったことから前代の和文体から中世の和漢混淆文が成立したといえる。また、漢語が増加し、生活語として日常的に用いられるに伴い、書き言葉としての漢語本来の性格から日常語・口頭語として役割を担うものとして転じたものも生じ、さらには、中国にない日本独自の漢語が作られるということも生じたのである。

狂言は室町時代の庶民層を基盤に成立した芸能であり、その台詞は基本的には上方の話し言葉に基づいていることは周知の通りである。従って、狂言の台本に関する国語学的研究についていえば、台詞としての顕著な口語的性格と、南北朝期に成立し、室町時代の口語を基盤に展開していたであろう、その時代性の故に、早くから中世語の貴重な資料として注目されていたといえる。しかし、厳密に考えてみた場合、実際に我々の見うる台本がだいたい江戸時代以降のものであり、それらに

近世以降の言葉の混入が明らかに認められているなどによって、狂言の言葉がどの時期の言葉を反映するものであるか、また諸台本に見られる相違は何を意味し、またそれらをどのように使用すべきか、などという基本的な問題が十分に解明されていない事情もあって、必ずしも十分に利用されていなかったともいえる。尤も、最近において、中近世の日本語の研究の著しい進展と、それに狂言の各流派の古本の複製・翻刻とが伴って、上述の問題への配慮のもとに研究の急速な進展が見られるようになった。

本論文の研究史の項目の中でも触れたように、台本の研究からはじめ、語彙・語法・表記の研究など狂言のことばに関する研究は多数見られるが、狂言集に用いられている漢語についての論考は佐々木峻氏の以下の論文以外は管見ではないようである。

佐々木 峻 (1976)「大蔵流狂言虎明本の漢語——対話表現場面における、動詞的用法と形容詞的用法と——」(『国文学攷』72.73)

同 (1977)「大蔵流狂言虎明本の漢語——対話表現場面における、副詞的用法——付、助数詞的用法」(『文教国文学』6)

同 (1977)「大蔵流狂言虎明本の漢語——対話場面における形容動詞的用法について——」(『広島大学教育学部紀要』25-2)

同 (1980)「大蔵流古狂言虎明本における漢語形容動詞連体形の一用法—「～ナ」「～ナル」と「～ノ」」(『国語教育研究』広島大学教育学部26上)

佐々木氏は、狂言集に用いられている漢語品詞を事例中心に、用法面から整理し、漢語の用法には、本来的な名詞用法の他に動詞的用法、形容詞的用法、形容動詞的用法、副詞的用法、接辞的用法、助数詞的用法が認められるとし、字音語の日本語化現象としてとらえている。しかし、氏の論文には意味面での考察、他の資料との比較、特に出自面での考察などに欠けている。

本論文では、狂言集の研究の現段階の事情なども考慮し、大蔵虎明本狂言集に用いられている漢語を中心に量と質の両面から考察する。特に、中世語に漢語の進出が著しいといわれるが、実際にそういえるかどうかなど漢語の増加、進出の状況を考察し、漢語の中世的特徴を把握する。また、狂言集に見られる漢語の特徴を正確に把握するには他の資料との比較が必要であるため、共時面と通時面からの考察をも行わなければならない。

このような観点から、本研究の目的とする漢語の中世的特徴は何か、さらに中世前期と後期とではどのような相違点が見られるかなど、日本語史の観点から考察を進めていきたい。

2. 研究方法

大蔵虎明本狂言集の漢語を中心に漢語認定の範囲を定め、以下の諸作品及び索引からすべての漢語の抽出作業を行った。なお、基本的には次の方法に従って漢語を抜き出し、コンピューター作業を通して論文構成にふさわしいデータ処理を行った。しかし、場合によっては恣意的な判断をせざるを得ない時も、あったことを断っておきたい。

2.1 漢語の認定について

- ①漢語の判定は、まず索引から漢語として扱われる語を全部抽出し、さらに本文でその表記を確かめた。
- ②漢語の単位の取り方については、原則的に本文の漢語の意味を生かす方針を取った。
- ③固有名詞・人名・地名・官職名などは漢語の対象から外した。
- ④基本的に接尾語「～様・～達・～等・～殿など」は取らないが、「一族衆」の「衆」は生かした。
- ⑤和漢混交の場合は、混種語として扱った。

2.2 本研究で用いたテキスト及び索引類

- 北原保雄・池田廣司『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇上・中・下』（表現社）
- 北原保雄・村上昭子他七名編（1984～85）『大蔵虎明本狂言集総索引1～8』（武蔵野書院）
- 北原保雄・大倉浩著（1983）『狂言記の研究 上（影印篇）・下（解説篇・翻字篇・索引篇）』（勉誠社）
- 日本古典文学大系（1958）『御伽草子』（岩波書店）
- 榊原邦彦・藤掛和美・塚原清編（1988）『御伽草子総索引』（笠間書院）
- 江口正弘（1986）『天草版平家物語対照本文及び総索引 本文篇・索引篇』（明治書院）
- 宇津保物語研究会編（1975）『宇津保物語本文と索引』（笠間書院）
- 金田一春彦他編（1973）『平家物語総索引』（学習研究社）
- 坂詰力治・見野久幸編（1979）『平治物語総索引』（武蔵野書院）
- 同（1981）『保元物語総索引』（武蔵野書院）
- 大野晋・武藤宏子編（1979）『曾我物語総索引』（至文堂）
- 西端幸雄・志甫由紀恵編（1997）『土井本太平記本文及び語彙索引 索引編1～3』（勉誠社）
- 境田四郎他編（1995）『宇治拾遺物語総索引』（清文堂）
- 深井一郎編（1980）『慶長十年古活字本沙石集総索引』（勉誠社）
- 高尾稔・長嶋正久編（1985）『発心集本文・自立語索引』（清文堂）

3. 研究結果

3.1 大蔵虎明本狂言集の漢語について

大蔵虎明本狂言集における漢語を量的面での考察と質的面での考察について述べてきた内容をまとめると次のようになる。

①漢語（混種語も含む）の全体像から狂言集では、使用度の高い漢語・混種語は限られた、わずかの漢語・混種語（使用度10回以上の漢語・混種語）によってまかなわれているのに対し、使用度の低い漢語・混種語は全異なり語数の82.4%（使用度1から5までは2,778語）を占め、狂言集の表現の多様性を低使用度の語によって示している。

②その品詞別使用度とその性格から、漢語・混種語全体の異なり語数で名詞が3,022語（89.6%）、動詞が192語（5.7%）、形容動詞が141語（4.2%）、形容詞が5語（0.1%）、副詞が12語（0.4%）となる。また、全延べ語数に対する各品詞の延べ語数の占める比率は、名詞が71.61%、動詞が19.02%、形容動詞が8.35%、形容詞が0.04%、副詞が0.98%となる。このことから漢語・混種語における品詞の使用度からうかがわれることは、名詞が異なり語数に対する比率と延べ語数に対する比率のいずれも高い使用度を占めていることから、狂言集の中の漢語名詞はいわゆる『源氏物語』などの和文体の文献の中に用いられている名詞の比率と類似の分布を示している点である。一方、動詞と形容動詞においては、混種語の使用度とその性格でも明らかになったことであるが、中古から日本語と融合して用いられていた漢語サ変動詞は、異なり語数では高使用度を示している反面、延べ語数では形容動詞より低使用度を占めていることから漢語サ変動詞はやや特定の場面や位相語として用いられた可能性が高いと考えられる。ただし、これについては量的な考察からうかがわれるものであることを断っておく。なお、日本語の中に漢語を受容するにあたり、形容動詞は漢語に活用語尾「タリ・ナリ」を下接させることにより容易に作り出されるが、形容詞は漢語に活用語尾「シ」を下接させることが容易でないため、もっぱら形容動詞によって担われた。それ故、形容動詞は形容詞に比べられないほど語数が多いのである。また、形容詞と副詞に対しては名詞・動詞・形容動詞の使用度とは逆に異なり語数の比率も延べ語数の比率もともに低比率を示していることから、形容詞・副詞は日本語の漢語受容の位置からみて低いといわなければならない。

③漢語（字音語）のみの全体像から、100回以上の異なり漢語数の全異なり漢語数に対する比率は0.3%、それに50回までを加えて1.3%、20回までを加えて6.0%、10回までを加えて11.5%となり、混種語を除いた字音語のみの比率も、漢語・混種語を合わせた場合（11.3%）とその分布においてほとんど変わっていない。しかし、使用度1回の異なり漢語数の全異なり漢語数に対する比率は、48.8%、使用度2回までを加えると64.6%、5回まで加えると81.2%となる。異なり漢語数の使用度1回から5回まで加えた全異なり漢語数に対する比率も、やはり漢語・混種語の場合（82.4%）

とほとんど変わっていない。従って、使用度の低い漢語が使用漢語のほとんど（81.2%）を占め、漢語（混種語も含む）の全体像と同様に狂言集の多様性・独自性は低使用度の漢語（字音語）に依存している可能性が強くなっている。

④その字数別使用度とその性格から、一字漢語は名詞として使われるもので、日本語の中では漢語としての意識がそれほど強くない語であるとみることができる。なお、狂言集の一字漢語が全異なり語数と全延べ語数に対する比率とも平家物語の一字漢語より比率としてやや高いことがわかる。一字漢語が、平家物語の時代に比べて狂言集の時代では、より日本語化し、定着していることを意味していよう。

二字漢語は、日本語の中に入る漢語の最大数の量を占めるものとして、その大多数が名詞として取り入れられたものである。本論文の中ですでに述べたように、現代語では、二字漢語の使用率は異なり語数では90%を越え、延べ語数では85%である。それは、主に漢語の事物が日本に受容された時、和語語彙の足りない概念を端的に示し得るものであったため、ある意味では当然の結果でもある。狂言集の二字漢語が全異なり漢語に対する比率は71.5%であり、全延べ語数に対する比率でも、73.1%と近い比率である。一方、平家物語の二字漢語の異なり漢語の比率も78.5%、延べ語数の比率が78.8%で、やはり狂言集と近い比率を示している。狂言集の一字漢語と二字漢語との使用度は、延べ語数の約90%を占め、狂言集では一字漢語・二字漢語が漢語のほとんどである。これは平家物語でも同様であり、漢語受容の一つの型を示している。一方、三字漢語の使用度は、狂言集・平家物語ともに異なり語数3位の一字漢語に比べ、極めて低比率となり、日本語の中に受容される場合、有力にならなかった漢語であったことが知られる。四字漢語では、狂言集の方が平家物語よりやや有力になっているが、これは、室町時代に漢語使用が拡大して使用されていることを示している。これは、五字漢語以上でも狂言集が有力になっているのは同じ理由からである。

以上のように、狂言集の漢語は、中世のはじめの平家物語と比較するとかなり類似した分布を示しているが、詳細に検討すると、狂言集は、より漢語受容が一般化した時代の資料であることが明らかにになった。

⑤混種語の使用度とその性格から、異なり語数の使用度が名詞→動詞→形容動詞の順になっているが、これは漢語を受容した場合、名詞の受容には、助詞を下接させれば、かなりの構文要素として用いることができるため、もっとも受容し易い品詞であり、次に動詞性漢語に「す」を下接させれば、動詞が形成され、それが必要な構文には容易に用いることができるからである。動作性と状態性を兼ねた形容動詞は、それを必要とする構文は、動詞より少ないと考えられるので、使用度が3位になったものとみられる。

名詞の異なり語数では、漢字三字以上の語（57.0%）、二字漢語（43.0%、内訳は湯桶読みの語（23.2%）、重箱読みの語（19.8%）である。）の順に分布し、漢字三字以上の語が混種語の半数以上

を占めている。重箱読みの語と湯桶読みの語では、湯桶読みの語が優勢となっている。一方、延べ語数でも、漢字三字以上の語（48.0%）、二字漢語（52.0%、内訳は湯桶読みの語（32.7%）、重箱読みの語（19.3%）である。）の順に分布し、順位の変わりはないが、重箱読みの語と湯桶読みの語の延べ語数率は約13%も差がある。この理由は、湯桶読みの語の「然様93」「斯様67」のような例でもわかるように、慣用語が多く用いられているためである。

動詞ではほとんどが漢語サ変動詞（182語）となり、その他、漢語に接尾語を加えた語（「興がる」「殊勝がる」「迷惑がる」「不審がる」「豪気ばる」「剽げる」の6語）、漢語の韻尾を活用させた語（「問答ふ」「羅齋ふ」の2語）、漢語に和語動詞を加えて融合させた語（「御座る」「絵取る」の2語）はほとんど勢力がなかった。

一方、形容詞関係では、形容動詞でもって用いることが一般で、形容詞として用いることは皆無である。5語用いられている形容詞は「情+強し」のように、漢語「情」に日本語の「強し」が接続したもので、形容詞として働きは日本語が担っている。

副詞は、漢語サ変動詞型の語形と漢語形容動詞の連用形型の語形を取りながら固定化したものである。これも異なり語数はわずかであるが、「総じて」のように使用度（121回）の高い語として頻繁に用いられる語もあった。

⑥漢語（字音語）の表記については、

大蔵虎明本狂言集の漢語の表記と出典では、延べ語数においては仮名表記で示すことが一般で、漢字表記のみは少ないことが知られる。このことは、異なり語数においても、使用頻度1位の仮名表記のみが56.4%を示し、対応している。漢字仮名併用表記は当然仮名表記が認められるので、これら二項目を加えると、その比率は77.6%となり、やはり仮名表記の優位は動かない。これは、狂言集が様々な階層の前で演じるものとして口語的な台本の性格から漢字の持つ表意性より、音（読み）をはっきりさせることのできる工夫がなされていたことと関係があるものと思われる。また、漢語の出典から見ると、漢字表記のみの場合と仮名表記のみの場合とでは、それほど差は見られず、いずれも漢語は漢籍・仏典に出典を有している語がほとんどであることが明らかになった。強いて言うならば、漢字表記語は、多くの人々に自明のものとして、知られている漢字語と考えられる。

一方、狂言記の漢語の表記と出典では、漢語を表記する場合、延べ語数においては漢字表記で示すことが一般で、仮名表記のみは少ないことが知られる。このことは、異なり語数においても、使用頻度1位の漢字表記のみが48.1%を示し、対応している。漢字仮名併用表記は当然漢字表記が認められるので、これら二項目を加える比率は64.5%となり、やはり漢字表記の優位は動かない。これは、狂言集（大蔵虎明本）が様々な階層の前で演じるものとして口語的な台本の性格から漢字の持つ表意性より、音（読み）をはっきりさせることのできる工夫がなされていたことに対し、狂言記では、一般読者に読まれることを前提として版行されたものであるが故に、漢字の持つ表意性を

生かす工夫がその漢語表記に反映されたと考えられる。また、漢語の出典から見ると、狂言集の場合と同様の結果になった。結論として、中世に多量の漢語が日本語の中に受容されたとされているが、そのほとんどが漢語・仏教用語をそのまま受容したものであって、日本で新たに造語した漢語（和製漢語の類）は、少数であったことが明らかになった。

⑦漢語（字音語）の出自の考察から、狂言集の高使用度（使用度10回以上の語）の字音語を用例の出現時期を、(a) 平安時代まで見える語 (b) 鎌倉時代に見える語 (c) 室町時代以降に見える語の三時代に区分し、室町時代以降に見える語を平安時代・鎌倉時代と比較した結果、狂言集の高使用度（使用度10回以上の語）の字音語は、平安時代まで見える語が155語（51.2%）、鎌倉時代に見える語118語（38.9%）、室町時代以降に見える語が30語（9.9%）であった。このように、狂言集の高使用度（使用度10回以上の語）の字音語のほとんどは、平安時代・鎌倉時代の語（90.1%）を受け継いでいることが知られる。

室町時代に受け継がれた漢語は、一字漢語では、平安時代・鎌倉時代の漢語受容でもっとも有力であった「文化」関連語を受け継いでいる。二字漢語では、平安時代でもっとも有力であった「文化」関連語、鎌倉時代の「人事」関連語を受け継ぎ、三字以上の漢語では平安時代・鎌倉時代で有力であった「人事」関連語が受け継いでいる。

このような語群に偏っているのは、本来日本語に欠如している語を受容するという典型的なパターンを示しているのである。

⑧混種語の出自の考察から、

名詞を（イ）漢字二字の語（重箱読み・湯桶読み）、（ロ）漢字三字以上の語に分けて、用例の出現時期を（a）平安時代まで見える語（b）鎌倉時代に見える語（c）室町時代以降に見える語にすると、名詞の総計では、平安時代まで見える語が25語（6.0%）、鎌倉時代に見える語が40語（9.5%）、室町時代以降に見える語が354語（84.5%）となり、室町時代の混種語が全体の80%以上を占めている。これは室町時代がもっとも漢語の日本語化が進んだ証左であり、字音語では室町時代が平安時代・鎌倉時代に比べ、もっとも低比率であったこととは好対照をなしている。

すなわち、字音語では平安時代・鎌倉時代の漢語をそのまま受け継いでいることになるが、混種語では室町時代に漢語が新たに和語と複合して新語を生み出したことになる。

動詞は、全体で192語となり、形態別には漢語にサ変格動詞を加えたサ変動詞（182語）と漢語に接尾語を加えた語（6語）や漢語の韻尾を活用させた語（2語）そして漢語に和語動詞を加えた語（2語）に分けることができる。これを出自別に見ると、その半数が平安時代までに既に存在していることがわかる。従って、日本語の中に融合し、日本語化の著しい品詞といえる。鎌倉時代では前時代に比べやや比率が低いですが、それでも新しい混種語を発生させ、また狂言集の時代即ち室町時代でも特定の動詞（「御座る2,706」）を除くと使用率は低いですが、新しい混種語を着実に形成してい

たことがうかがわれる。字数別分布からみても平安時代までと鎌倉時代では、皆無であった三字漢語・四字漢語がわずかではあるが、狂言集の時代に出現し、新たな混淆の形が三字漢語・四字漢語として現れていたことと理解できる。このことから混種語の動詞は、日常語として日本語の中で違和感なく使用されていたことになる。また、延べ語数の比率を比較すると、狂言集の時代では特定の動詞一例以外は高使用度の漢語がほとんどなく、低使用度の語によってまかなわれていることから、平安時代・鎌倉時代よりは狂言集の時代が混種語の使用率は低い、新しい混種語の広がりを見せているといえよう。

なお、室町時代以降に見える漢語サ変動詞を中心にその使い手を階級により分析した結果、漢語の享受者は、女性が用いる場合は少ないものの、貴族階級・僧侶にとどまらず一般庶民まで広がりを見せ、室町期が漢語・混種語の定着・普及の著しい時代であったことがわかる。

形容動詞では、全体の比率から、平安時代までが35.5%、鎌倉時代が31.2%、室町時代が33.3%となり、室町時代が、動詞では最も劣勢であったが、形容動詞では平安時代の次に優勢な姿をみせているのである。また、形容動詞の形態上、漢語に「ナリ」「タリ」が後接した形が大多数を占めているが、混種語に「ナリ」「タリ」が後接する形も8語がみられる。平安時代までにみえる例で、「如何様なり」の一例を除けば、他は室町時代にみえる。この8語を形態面から分析すると、「は文字なり」の一例を除けば、いずれも「漢語＋和語＋なり」の形をもち、「和語＋漢語＋なり」の語構成は稀である。

なお、形容動詞の使い手を階層により分析した結果、漢語サ変動詞では女性に用いられた語が一語であったが、形容動詞では皆無であり、庶民が使い手としてより多く登場する。このことから、形容動詞でも次のことがいえよう。

作品の性格上、主従（シテ役とアド役）という形で登場人物を分けるため、狂言集を出典とする語については主従の区別が目立つものの、階層より分類すると狂言集の時代即ち室町時代が漢語の定着と同時に享受者が庶民にまで広がりをみせ、漢語サ変動詞と同様に漢語の享受層の拡大時期を形容動詞でも示していることがわかる。

以上、狂言集に現れる名詞・動詞・形容動詞を出現時代ごとに考察した結果を品詞別の比率の順に配列すると、平安時代までに用いられている品詞は、

動詞（55.7%）→ 形容動詞（35.5%）→ 名詞（6.0%）

の順に比率が下がり、鎌倉時代では、

形容動詞（31.2%）→ 動詞（24.5%）→ 名詞（9.5%）

の順になり、室町時代では、

名詞（84.5%）→ 形容動詞（33.3%）→ 動詞（19.8%）

となっている。これは、時代による品詞の出現率を如実に示しており、日本語と熟合した漢語混種

語の高使用度の品詞は、作り易い品詞から始まっているのである。混種語を作りはじめた平安時代まででは、漢語に「す」を下接させて動詞を作ることが最も容易であり、次に漢語に「なり」「たり」を下接させる形容動詞であった。名詞の混種語は日本語化が容易でなかったものである。

ところが、鎌倉時代になると、漢語サ変は造語力を失い、場面や状況の表現に柔軟に対応できる形容動詞が勢力を延ばしている。名詞は、平安時代よりは進出がやや目立つようになっているが、それほどではなかった。

しかし、室町時代になると、名詞が圧倒的な使用度を示しているのが特徴である。これは、漢語が普及し一般化して、動詞は「す」、形容動詞は「なり」「たり」を添加するという単純な受容方法だけでなく、語の内部の混淆、すなわち重箱読みや湯桶読みの語を用いても日常の言語生活に支障をきたさなくなった時代を迎えたことを示している。

狂言集の時代は、漢語が日常生活用語として定着し、享受階層の広がりをみせる、いわゆる漢語の定着・普及の著しい時代でもあったといえることができる。

3.2 中世後期と前期の資料との比較について

本論文では、中世語の史的考察という観点から大蔵虎明本狂言集の漢語を中心に質と量の両面から述べてきたが、ここでは、中世前期の漢語と後期の漢語とはどのような性格付けができるかを見ると同時に課題も挙げ、最後のまとめとしたい。

量的な考察からは、まず、第一に使用度に注目した場合、狂言集の漢語・混種語は同時期の天草版平家物語や御伽草子と中世前期の軍記物語や説話物語とに比べて高使用度の語が異なり語数においても延べ語数においても多く現れ、狂言集の漢語の使用度がどの段階でも高い比率を示しているのが特徴である。これは、狂言集が資料の性格上、狂言特有の語「御座る」「存ず」「御座」などが多く使用された結果からと考えられる。なお、字音語のみの場合においても漢語・混種語の場合と同様の傾向を示しており、言い換えれば、混種語は漢語・混種語全体から見た場合、使用度に影響を及ぼすほどの勢力ではなかったことになる。

第二に、品詞別に占める割合は、名詞が圧倒的な勢力を見せ、漢語受容の典型であり、ついで動詞、形容動詞の順で、そして副詞と形容詞は漢語受容史から見るとわずかな比率を占めているにすぎない。

第三に、字数別に占める割合では、二字漢語が最多で、ついで一字漢語が占め、一字・二字漢語が全体の8割以上となり、同時期の天草版平家物語や御伽草子と同様、平安時代の仮名文学などに見られる字数別比率に比べると、10%～20%強である。しかし、前期の軍記物語や説話物語においては、平家物語を除くと、やや平安時代の仮名文学に見られる字数別比率に近い、70%前後の比率を見せている。これは、同じ中世といっても前期と後期とはやや性質を異にし、漢語受容において

前期は過渡期的時代であるといえよう。

次に質的考察からは、まず、字音語を出自の面から見ると、狂言集では80%以上が平安・鎌倉時代にすでに使用されていた語で、言い換えれば、平安時代・鎌倉時代の語をそのまま受け継いでいるのである。これは、同時期の資料でも、前期の軍記や説話でもいえることで、歴史的に見ると、字音語は平安時代から鎌倉時代そして室町時代に受け継がれたのである。また、高使用度の漢語を意味面から見ると、一字漢語は共通的に文化関連語が、二字漢語では人事関連語が目立っているのが特徴である。

第二に、混種語の出自の考察からは、名詞が新語登場の様相を呈する品詞で、字音語の名詞が平安時代から鎌倉時代そして室町時代に受け継がれているのに対し、混種語名詞は新しくその時代に和語と混淆し、多く用いられたことを示している。すなわち、歴史的な面から考えると、平安、鎌倉、室町と混種語名詞は漸次増加していったといえよう。しかし、名詞に比べ、動詞・形容動詞では前期と後期とでそして前期も作品別に不規則に分布しているものの、基本的な語の多くは平安時代に登場し、鎌倉時代に漸次増加していく。

このように、見てみると同じ中世といっても前期の鎌倉時代と後期の室町時代とでは漢語受容史上、分けて考えなければならない時代である。

以上、狂言集を中心に、中世前期と後期との漢語受容の特徴、相違点などについて考察したが、狂言集の資料の性格上、狂言のことばが結局いつ頃のものであるか、という問いに答えるのは難しい。

その成立の事情から、内容のみならずことばの面においても、室町時代的なものがその骨格を成すと考えられるが、一方その伝承の仕方から見れば、室町時代を通して激しい流動がなされたことは疑いなく、いろいろ錯綜した形を経て江戸時代初めに一応の定着期に到達したものと考えられる。ただ、その資料を使用するに当たってはいろいろ考慮すべき問題はあるが、話しことば的要素を色濃く持つ狂言のことばが、室町時代の日本語資料として高い評価を持つことは言うまでもない。従って、このような事情をある程度明らかにするためにも漢字音についての考察が必要となってくるが、本論文では漢字音を取り上げる余裕を持たなかった。漢字音の考察については今後の課題にしたい。

論文審査結果の要旨

本論文は、計量国語学の手法を用いて、中世の漢語全体の動態を研究したものである。

これまで、個別的な研究はあったが、本論文は、それらの資料をまとめて当該時代の漢語として捉え、その全体の漢語がいかに向化・変貌しながら移行して室町時代の狂言集の漢語使用にたどりつくかを明らかにした。このような、時代の経過に伴う漢語全体の動態としての実態を示した研究は従来無かったものであり、特筆すべきものである。

また、狂言集を初めとして、とくに室町時代の漢語を集大成して一覧できるようにした本研究は、今後の室町時代の漢語研究の基礎となりうるものである。言語事実の報告・すなわち・記述研究も言語研究の一方法である。

本論文は狂言集、及び同時代の御伽草子、天草版平家物語、そして、鎌倉時代の軍記物語、説話物語などにつき、字音語・混種語の使用度、字数別使用度、品詞ごとの使用度、漢語の表記と出典、字音語・混種語の出自などを、主として計量国語学の手法で調査している。その際、狂言集と他の作品を比較対照し、単独作品だけで各章を構成しなかったのは、全体の動態を見るのに有効だからである。その結果、同じ中世と言っても、前期と後期ではかなり様相が異なることが判明した。例えば、一字漢語・二字漢語の漢語全体に占める割合は、前期では約70パーセントであるのに対し、後期では約80パーセントとなっている。字数別漢語の分布を明確に数字で示したのは本論文が初めてであり、今後の字数別漢語研究の基礎となるものである。更に混種語の出自では、室町時代に名詞混種語が飛躍的に増加しているのが特徴的である。この混種語の時代ごとの受容・同化についてやや詳しく述べると、平安時代では、動詞が最も多く、形容動詞、名詞と続き、鎌倉時代では形容動詞が最も多く、動詞、名詞と続く。それが室町時代になると、名詞が最多で、形容動詞、動詞の順になる。室町時代になってから出現した混種語のうち、名詞は実に85パーセントに達する。これは、時代による品詞出現率を如実に示すものであり、日本語と熟合した漢語混種語の高使用度の品詞は作りやすい品詞から始まっていることをはっきり数字で示したものであり、大きな業績と言わなければならない。

本論文にはいくつかの問題点がある。①漢語の出現時期や出典の有無の決定は、辞書、索引などに依拠しているが、これは100パーセント信頼できる方法ではない。しかし、本研究は、従来行われなかった共時的、通時的な研究であり、巨視的な研究であって、一語一語に歴史的考証を加える微視的な研究とは全く性質を異にするものである。従って、その意味で容認される方法であると言えるが、この方法の意味や有効性についての十分な議論がなされていない。②計量的な方法そのものの、当該研究にとっての有効性についての議論が十分ではない。③漢語の品詞を、原典の文脈にあたっているとは言え、いささか機械的に決めているきらいがある。④漢語を意味分類し、漢語の

意味分野と出現時期とを関係づけて論じているが、これは意欲的な試みとは言えるものの、分類の基準は説得力をやや欠いている。⑤狂言集の漢語がどこまで室町時代のものと言えるかについて、十分に考察が加えられているとは言い難い。

このように問題点をいくつか含んでいるが、中世の漢語全体を歴史的に捉えたのは本研究が初めてであり、新しい重要な発見をいくつかなしていること、今後の室町時代の漢語研究の基礎となること、また、今後、この方法を応用した韓国の漢語受容の研究、更に日韓の漢語受容の比較研究などが期待されることなど、全体として、博士論文として必要なレベルに達していると考えられる。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。